（参考）

犬の繁殖における死亡率等の科学的知見

① 2001 年　オーストラリア

PERINATAL AND LATE NEONATAL MORTALITY IN THE DOG Marilyn Ann Gill
A thesis submitted to The University of Sydney for the degree of Doctor of Philosophy
March 2001

（概要）

・発表年 2001 年　500 回の出産で 2574 頭の子犬を対象に調査
・18.5%の子犬が安楽死を除いて死亡（7.0%が死産、9.8%が 8 日経過未満で死亡）
・死亡した子犬のうち低酸素症による死因が 42.5%にのぼった（全出生数の 7.8%）
・低酸素症で死亡した仔犬（42.5%）うち 82.2%は出産時及び 24 時間以内に死亡した
・全体の死亡のうち、半分の死亡したケースは難産によるものだった

②2012 年　ノルウェー

Canine perinatal mortality: A cohort study of 224 breeds

（概要）

・大規模調査により、様々な品種や、母犬の年令、出生数、季節による出生時死亡率の違いについて観察。
・ノルウェーケネルクラブ 10810 頭、224 種の犬を対象に 2006 年～2007 年にかけて出生後 8 日間と 8 週間における生存率を集計（出生時死亡率は、死産および 1 週間以内の死亡を集計）
・全ての出産のうち、24.6%の出産で死亡した仔犬がいたことが確認
・8 日間経過前に 8%の仔犬が死亡。うち、4.3%が死産で、3.7%が出生後死亡
・出産後 8 日～8 週間の間の死亡率は１%

③フランス

Reproductive performances of dogs in a large French breeding kennel

（概要）

・2008 年 8 月から 2010 年 8 月までの間、フランスの大型犬舎で飼養されている 278 頭の母犬の 668 腹、合計 3711 頭の仔犬を出産。
・母犬の犬種（25kg 以上が大型、25kg 未満が小型）、年齢、1 腹の仔犬の数、仔犬については、生後 2 月までの死亡を記録。
・調査の結果では、

受胎率は大型犬種と小型犬種でほとんど差がなかったが、年齢による受胎率の有意な低下が見られた（Fig 1）。

誕生から離乳までの合計死亡率は、大型が 25.2%（262/1039）、小型が 30.9%（826/2672）であった。母犬の年齢による死亡率のばらつきは見られなかった（Fig 2）。

平均 1 腹頭数は、大型が 7.8 頭、小型が 5 頭であった。1 腹数は、母犬の年齢に伴って次第に減少していた（Fig 3）。

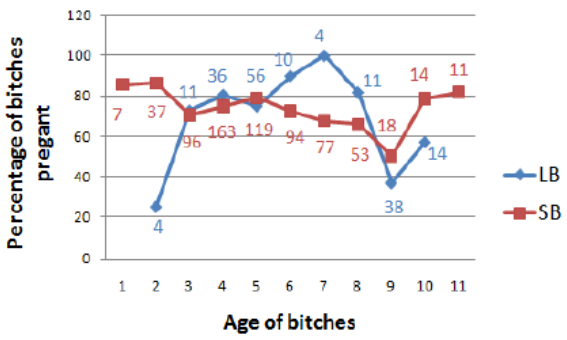

Fig 1: Effect of breed size and age on pregnancy rate

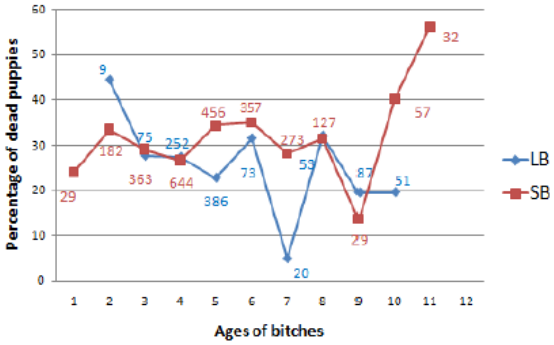

Fig 2 : Effect of breed size and age on mortality rate between birth and weaning

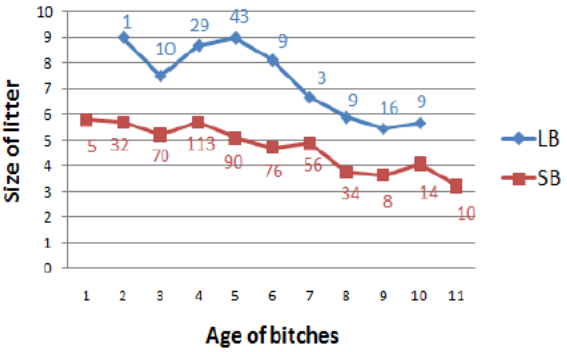

Fig 3 : Effect of breed size and age on litter size